

福祉の歴史散歩

大阪の福祉の源流をたどる



なにわの福祉を支えた実業家たち(利益を社会に)③ —鳥井信治郎と邦寿会など—

本稿は三話完結の第三話です。

寿屋(サントリー)の創業者で、国内初のウイスキー生産を行った鳥井信治郎(1879~1962)は、早くから福祉に関心が深く、福祉団体「邦寿会」も創設しました。

鳥井信治郎は、明治12年1月、大阪市東区(中央区)の釣鐘町の商家(両替商、のちの米穀商)で、末っ子として出生。大阪商業学校に進みましたが、2年で退学。「商人に学問なんかはいらん。身をもって学べ」という親の方針によるものでした。

13歳のとき、小西儀助商店(東区道修町)へ丁稚奉公(住込)。ここは輸入洋酒や合成酒等も扱う薬種問屋で、鳥井は、自慢の「鼻」と「舌」をフルに活用して、洋酒の製造法・鑑定法を学び、これが、彼の生涯を決定します。3・4年修行したころ、先輩と喧嘩ばかりしてクビになってしまいました…。

明治32(1899)年、20歳のとき、独立して「鳥井商店」(西区靱中通)を開業。ついで、明治39(1906)年、「寿屋洋酒店」と改称し、本格葡萄酒の醸造、発売を行いました。日本人の口に合うように工夫した「赤玉ポートワイン」などです。

株式会社「寿屋」の創業は大正10(1921)年12月で、資本金は百万円でした。ただし、「社長」という呼称を嫌い、「大将」と呼ばせ、得意先周りをするとときは、羽織袴でなく、印半纏を着用しました。名より実をとったのです。

鳥井は、当時としては珍しいほど広報宣伝に力を注ぎました。芸者たちの隠語の「日の丸」(生理)を「赤玉」といわせ、医学博士に「健康に有効」との証明書を書かせて宣伝に活用しました。「赤玉ポートワイン」のポスター(セミヌード)も話題を集めました。

こうして「赤玉ポートワイン」が大当たりし、次いで、半練り歯磨「スモカ」、「オラガビール」なども開発・発売して、業績をあげました。

やがて、国内初のモルトウイスキー醸造に着手(山崎工場を建設)しました。しかし、醸

成するまでには何年も要し、しかも、毎年続けて仕込まなければならないため、資金繰りに窮し、「スモカ」、「オラガビール」などを売却するハメとなりました。

こうして漸く、「サントリーウイスキー」「トリスウイスキー」の発売に漕ぎ付け、わが国随一の洋酒会社に成長させたのは周知の通りです。

鳥井は、母の影響を受けて信心深く、慈善活動を他に類を見ないほど頻繁に行っています。例えば、毎年、釜ヶ崎(あいりん地区)に白や杵などを運び込んで餅つきをし、付近一帯の貧困世帯に餅を配布しました。また、匿名の奨学資金を設けて貧困学生の援助を行いました。「陰徳あれば陽報あり」との母の教えに従ったのです。

徳風学園には、給食用米を継続して提供。これが通学意欲を大いに高めました。子どもたちは給食に釣られて学校に向かい、親も食口が減るので積極的に通学させたからです。

そのほかにも、慈善事業へ随時出費しました。大正12(1923)年9月の関東大震災の際には、輸送船をチャーターして、被災者への救援物資を送っています。

鳥井は、利益を①顧客・得意先へのサービス、②社会還元(世のため、人のため)、③事業資金、設備充実に三分するべきだ、というのが口癖だったといえます。

「邦寿会」を設立してバラバラの社会事業を組織化したのは、妻(クニ)の死去が動機のようなのです。昭和16(1941)年、財団法人(戦後、社会福祉法人)に組織変更しました。

なお、邦寿会は、戦争直後、路上生活者のための粥の炊き出し(大阪駅周辺)をし、被災者等の宿泊者施設「駒川宿泊所」(のち、母子寮「駒川ホーム」)、「赤川宿泊所」(のち、養護老人ホーム「赤川ホーム」)や、「赤川保育所」を設立しました。

また、鳥井は、邦寿会とは別に、九条賢子が昭和30(1955)年に設立した保育園「無

憂園」(此花区伝法)にも、設立当初から物心両面で支援、理事長に就任していました。

明治・大正期の大阪では、市民たちの福祉活動が他では類を見ないほど活発でした。ここで述べたことはごく一部に過ぎません。小河滋次郎は、次のように続けています。「そしてこの趣味が…段々生活に多少の余裕のある中流以上の人の間にも行われ…新聞に悲惨な記事が出ると、或は新聞に託したり、或は直接金品を贈ったり、或は区役所へ持参するということが盛んになり、救済趣味の向上が著しく認められる」と。

近年、企業のフィランソロピー(社会貢献活動)ということがよくいわれるようになっていますが、この頃は、まだ実業家個人の活動が中心です。その中であって、本山彦一が毎日新聞の編集方針の一つに「利益は公共事業に」を掲げたこと、鳥井信治郎の口癖が「利益の三分の一を社会還元(世のため、人のため)」であったことは特筆すべきでしょう。

とはいえ、企業のような大きな活動だけが重要なわけではありません。むしろ、それぞれの地域に住む人たち、いわば名もなき人々たちによる活動(何でも自分の提供できるものを、無理しない範囲で出し合いこと)こそ重要です。明治・大正期の大阪では、それがあったようです。有隣小学校が設立されたとき、「一度この美挙を発表せられるや、四方同情の人士先を争い学校用品、衣類、帽子、靴、下駄、浴券等寄贈するものあり、かくして…たちまちにして開校は行はれたり。」と『難波警察署沿革誌』は述べています。



※この稿は、大阪市社会福祉研修・情報センターで開催された「社会福祉史の市民講座」の講演[講師：西野孝 花園大学名誉教授]から抜粋したものです。(言葉については、歴史的事実として当時の表現をそのまま使用しています)